校異源氏物語・梅かえ

御もきのことおほしいそく御こゝろをきて世のつねならす東宮もおなし二月に御かうふりのことあるへけれはやかて御まいりもうちつゝくへきにや正月のつこもりなれはおほやけわたくしのとやかなるころをひにたき物あはせ給大弐のたてまつれるかうとも御覧するになをいにしへのにはをとりてやあらむとおほして二条院のみくらあけさせ給てからのものともとりわたさせ給て御らむしくらふるにゝしきあやなとも猶ふるき物こそなつかしうこまやかにはありけれとてちかき御しつらひのものゝおほひしきものしとねなとのはしともに故院の御よのはしめつかたこまうとのたてまつれりけるあやひこんきともなといまの世のものにゝすなをさま〳〵御らむしあてつゝせさせ給てこのたひのあやうすものなとは人〳〵に給はすかうともはむかしいまのとりならへさせ給て御かた〳〵にくはりたてまつらせ給ふたくさつゝあはせさせ給へときこえさせ給へりをくりものかんたちめのろくなと世になきさまにうちにもとにもことしけくいとなみ給にそへてかた〳〵にえりとゝのへてかなうすのをとみゝかしかましきころなりおとゝはしんてんにはなれおはしまして承和の御いましめのふたつのほうをいかてか御みゝにはつたへ給けん心にしめてあはせ給うへはひんかしのなかのはなちいてに御しつらひことにふかうしなさせ給て八条の式部卿の御ほうをつたへてかたみにいとみあはせ給ほといみしうひし給へはにほひのふかさあさゝもかちまけのさためあるへしとおとゝの給人の御おやけなき御あらそひ心なりいつかたにもおまへにさふらふ人あまたならす御てうとゝもゝそこらのきよらをつくし給へるなかにもかうこの御はことものやうつほのすかたひとりのこゝろはへもめなれぬさまにいまめかしうやうかへさせ給へるにところ〳〵のこゝろをつくし給へらむにほひとものすくれたらむともをかきあはせていれんとおほすなりけり二月の十日あめすこしふりておまへちかきこうはいさかりに色もかもにるものなきほとに兵部卿の宮わたり給へり御いそきのけふあすになりにけることともとふらひきこえ給むかしよりとりわきたる御なかなれはへたてなくそのことかのことゝきこえあはせ給てはなをめてつゝおはするほとに前斎院よりとてちりすきたる梅のえたにつけたる御文もてまひれり宮きこしめすこ

ともあれはいかなる御せうそこのすゝみまいれるにかとておかしとおほしたれはほゝゑみていとなれ　くしきこときこえつけたりしをまめやかにいそきものし給へるなめりとて御文は引かくし給つちむのはこにるりのつきふたつすゑておほきにまろかしつゝいれ給へりこゝろはこむるりには五えうのえたしろきには梅をえりておなしく引むすひたるいとのさまもなよひやかになまめかしうそし給へるえんあるものゝさまかなとて御めとめ給へるに

　花の香はちりにし枝にとまらねとうつらむ袖にあさくしまめやほのかなるを御覧しつけてみやはこと　くしうすし給さいしやうの中将御つかひたつねとゝめさせ給ていたうゑはし給こうはいかさねのからのほそなかそへたる女のさうそくかつけ給御返も其色のかみにておまへの花をおらせてつけさせ給宮うちのことおもひやらるゝ御ふみかなゝにことのかくろへあるにかふかくかくし給とうらみていとゆかしとおほしたりなにことか侍らむくま　くしくおほしたるこそくるしけれとて御すゝりのついてに

　花のえにいとゝこゝろをしむるかな人のとかめん香をはつゝめとゝやありつらむまめやかにはすき　くしきやうなれとまたもなかめる人のうへにてこれこそはことはりのいとなみなめれとおもひたまへなしてなんいとみにくけれはうとき人はかたはらいたさに中宮まかてさせたてまつりてと思給るしたしきほとになれきこえかよへとはつかしきところのふかうおはする宮なれはなにこともよのつねにてみせたてまつらんかたしけなくてなむなときこえ給あえ物もけにかならすおほしよるへきことなりけりとことはり申給このついてに御方　くのあはせ給ともをの　く御つかひしてこのゆふ暮のしめりにこゝろみんときこえ給へれはさま　くおかしうしなしてたてまつり給へりこれわかせ給へたれにかみせんときこえ給て御ひとりともめしてこゝろみさせ給しる人にもあらすやとひけし給へといひしらぬにほひとものすゝみをくれたるかうひとくさなとかいさゝかのとかをわきてあなかちにおとりまさりのけちめをゝき給かのわかおほむふたくさのはいまそとうてさせ給うこむのちんのみかは水のほとりになすらへてにしのわたとのゝしたよりいつるみきはちかうゝつませ給へるをこれみつのさい相のこの兵衛のそうほりてまひれり宰相中将とりてつたへまいらせ給宮いとくるしきはむさにもあたりて侍かないとけふたしやとなやみ給おなしうこそはいつくにもちりつゝひろこるへかめるを人ゝのこゝろ　くにあはせ給へるふかさあさゝをかきあはせ給へるにいとけふあることおほかりさらにいつれともなきなかに斎院の御くろほうさいへとも心にくゝしつやかなるにほひこと

なりしゝうはおとゝの御はすくれてなまめかしうなつかしきかなりとさため給
たいのうへのおほむはみくさあるなかにはい花はなやかにいまめかしうすこし
はやき心しらひをそへてめつらしきかほりくはゝれりこのころの風にたくへん
にはさらにこれにまさるにほひあらしとめて給夏の御方には人〻のかう心　く
にいとみ給なる中にかす　くにもたちいてすやとけふりをさへおもひきえ給へ
る御心にてたゝ荷葉をひとくさあはせ給へりさまかはりしめやかなるかしてあ
はれになつかし冬の御かたにもときときによれるにほひのさたまれるにけたれ
んもあいなしとおほしてくのえかうのほうのすくれたるはさきのすさく院のを
うつさせ給てきむたゝのあそむのことにえらひつかうまつれりし百ふのほうな
と思えて世にゝすなまめかしさをとりあつめたる心をきてすくれたりといつれ
をもむとくならすさため給ふを心きたなきはん者なめりときこえ給月さしいて
ぬれはおほみきなとまいりてむかしの御物かたりなとし給かすめる月のかけ心
にくきをあめのなこりの風すこし吹て花のかなつかしきにおとゝのあたりいひ
しらすにほひみちて人の御心ちいとえんありくら人所のかたにもあすの御あそ
ひのうちならしに御ことゝものさうそくなとして殿上人なとあまたまいりてお
かしきふえのねともきこゆうちのおほいとのゝ頭中将弁の少将なともけさむは
かりにてまかつるをとゝめさせ給て御ことゝもめす宮の御まへにひはおとゝに
さうの御ことまいりて頭中将わこむ給てはなやかにかきたてたるほといとおも
しろくきこゆさい相中将よこふえふき給おりにあひたるてうし雲井とをるはか
りふきたてたり弁の少将ひやうしとりてむめかえいたしたるほといとおかしわ
らはにてゐんふたきのおりたかさこうたひし君なり宮もおとゝもさしいらへし
給てこと　くしからぬものからおかしきよの御あそひなり御かはらけまいるに
宮

うくひすのこゑにやいとゝあくかれんこゝろしめつる花のあたりにちよも
へぬへしときこえ給へは

色も香もうつるはかりにこの春は花さくやとをかれすもあらなん頭中将に
たまへはとりて宰相中将にさす

鶯のねくらのえたもなひくまてなをふきとをせよはの笛竹宰相中将

心ありて風のよくめるはなの木にとりあへぬまてふきやよるへきなさけな
くとみなうちわらひ給弁の少将

かすみたに月と花とをへたてすはねくらの鳥もほころひなましまことにあ
けかたになりてそ宮かへり給ふ御をくり物に身つからの御れうの御なをしの御

よそひひとくたりてふれ給はぬたき物ふたつほそへて御車にたてまつらせ給宮

花の香をえならぬ袖にうつしもてことあやまりといもやとかめむとあれは

いとくつしたりやとわらひ給ふ御車かくるほとにをいて

めつらしとふる里人もまちそみむ花のにしきをきてかへる君またなき事と

おほさるらむとあれはいといたうからかり給つき　くの君たちにもこと　くしからぬさまにほそなかこうちきなとかつけ給かくてにしのおとゝにいぬの時にわたり給宮のおはしますにしのはなちいてをしつらひて御くしあけの内侍なともやかてこなたにまいれりうへもこのついてに中宮に御たいめんあり御かた

くの女房をしあはせたるかすしらすみえたりねの時に御もたてまつるおほとなふらほのかなれと御けはひいとめてたしと宮はみたてまつれ給ふおとゝおほしすつましきをたのみにてなめけなるすかたをすゝみ御覧せられ侍なりのちの世のためしにやと心せはくしのひ思たまふるなときこえ給宮いかなるへきことゝも思たまへわき侍らさりつるをかうこと　くしうとりなさせたまふになん中

く心をかれぬへくとの給けつほとの御けはひいとわかくあいきやうつきたるにおとゝもおほすさまにおかしき御けはひとものさしつとひ給へるをあはひめてたくおほさるはゝ君のかゝるおりたにえみたてまつらぬをいみしとおもへりしも心くるしうてまうのほらせやせましとおほせと人のものいひをつゝみてすくし給つかゝる所のきしきはよろしきにたにいとことおほくうるさきをかたはしはかりれいのしとけなくまねはむも中　くにやとてこまかにかゝす春宮の御けんふくは廿よひのほとになんありけるいとおとなしくおはしませはひとのむすめともきほひまいらすへきことを心さしおほすなれと此とのゝおほしきさすさまのいとことなれは中　くにてやましらはんと左のおとゝなともおほしとゝまるなるをきこしめしていとたい　くしきことなりみやつかへのすちはあまたあるなかにすこしのけちめをいとまむこそほいならめそこらのきやうさくのひめきみたちひきこめられなは世にはえあらしとの給て御まいりのひぬつき　くにもとしつめ給けるをかゝるよしところ　くにきゝ給て左大臣殿三の君まいり給ぬれいけい殿ときこゆるこの御かたはむかしの御とのゐ所しけいさをあらためしつらひて御まいりのひぬるを宮にも心もとなからせ給へは四月にとさためさせ給御てうとゝもゝもとあるよりもとゝのへて御身つからもものゝしたかたゑやうなとをも御らむしいれつゝすくれたるみち　くの上手ともをめしあつめてこまかにみかきとゝのへさせ給さうしのはこにいるへきさうしとものやかてほむにもし給へきをえらせ給いにしへのかみなきゝはの御てとも世になをの

こしたまへるたくひのもいとおほくさふらふよろつのことむかしにはおとりさまにあさくなりゆくよのすゑなれとかむなのみなんいまのよはいときはなくなりたるふるきあとはさたまれるやうにはあれとひろき心ゆたかならすひとすちにかよひてなんありけるたへにおかしきことはとよりてこそかきいつる人〻ありけれと女てを心にいれてならひしさかりにこともなきて本おほくつとへたりしなかに中宮のはゝみやす所の心にもいれすはしりかい給へりしひとくたりはかりわさとならぬをえてきはことにおほえしはやさてあるましき御名もたてきこえしそかしくやしきことに思しみ給へりしかとさしもあらさりけり宮にかくうしろみつかうまつることを心ふかうおはせしかはなき御かけにもみなをし給らん宮の御てはこまかにおかしけなれとかとやをくれたらんとうちさゝめきてきこえ給ふこ入道の宮の御てはいと気色ふかうなまめきたるすちはありしかとよはき所ありてにほひそすくなかりし院のないしのかみこそいまの世の上すにおはすれとあまりそほれてくせそそひためるさはありともかの君と前斎院とこゝにとこそはかき給はめとゆるしきこえ給へはこのかすにはまはゆくやときこえ給へはいたうなすくし給そにこやかなるかたのなつかしさはことなるものをまんなのすゝみたるほとにかなはしとけなきもしこそましるめれとてまたかゝぬさうしともつくりくはへてへうしひもなといみしうせさせ給ふ兵部卿の宮さへもんのかみなとにものせんみつからひとよろひはかくへしけしきはみいますかりともえかきならへしやと我ほめをしたまふすみふてならひなくえりいてゝれいの所　くにたゝならぬ御せうそこあれはひとひとかたきことにおほしてかへさひ申給もあれはまめやかにきこえ給ふこまのかみのうすやうたちたるかせめてなまめかしきをこのものこのみするわかき人〻心みんとて宰相の中将式部卿の宮の兵衛督うちのおほいとのゝとうの中将なとにあしてうたゑを思　くにかけとの給へはみな心　くにいとむへかめりれいのしん殿にはなれおはしましてかき給ふ花さかり過てあさみとりなる空うらゝかなるにふるきことゝもなとおもひすまし給ひて御心のゆくかきりさうのもたゝのも女てもいみしうかきつくし給ふ御まへに人しけからす女房二三人はかりすみなとすらせ給てゆへあるふるきしうの歌なといかにそやなとえりいて給ふにくちおしからぬかきりさふらふみすあけわたしてけうそくのうへにさうしうちをきはしちかくうちみたれてふてのしりくはへておもひめくらし給へるさまあくよなくめてたししろきあかきなとけちえんなるひらはふてとりなをしよういし給へるさまさへみしらむ人はけにめてぬへき御ありさまなり兵部卿の宮わたり給ときこゆれはおとろき

て御なをしたてまつり御しとねまいりそへさせ給てやかてまちとりいれたてまつり給ふこの宮もいときよけにてみはしさまよくあゆみのほり給ふほとうちにも人〻のそきてみたてまつるうちかしこまりてかたみにうるはしたち給へるもいときよらなりつれ　くにこもり侍もくるしきまておもふ給へらるゝこゝろののとけさにおりよくわたらせ給へるとよろこひきこえ給ふかの御さうしもたせてわたりたまへるなりけりやかて御覧すれはすくれてしもあらぬ御てをたゝかたかとにいといたうふてすみたるけしきありてかきなし給へりうたもことさらめきそはみたるふることともをえりてたゝみくたりはかりにもしすくなにこのましくそかき給へるおとゝ御覧しおとろきぬかうまてはおもひたまへすこそありつれさらにふてなけすてつへしやとねたかり給ふかゝる御中におもなくくたすふてのほとさりともとなんおもふたまふるなとたはふれ給ふかき給へるさうしともゝかくし給へきならねはとうて給てかたみに御覧すからのかみのいとすくみたるにさうかき給へるすくれてめてたしとみ給にこまのかみのはたこまかになこうなつかしきか色なとははなやかならてなまめきたるにおほとかなる女てのうるはしう心とゝめてかき給へるたとうへきかたなしみ給ふ人のなみたさへ水くきになかれそふ心地してあくよあるましきにまたこゝのかんやのしきしの色あひはなやかなるにみたれたるさうのうたをふてにまかせてみたれかき給へるみところかきりなししとろもとろにあひきやうつきみまほしけれはさらにのこりともにめもみやり給はすさへもんのかみはこと　くしうかしこけなるすちをのみこのみてかきたれとふてのをきてすまぬ心地していたはりくはへたるけしきなりうたなともことさらめきてえりかきたり女の御はまほにもとりいて給はす斎院のなとはましてとうて給はさりけりあしてのさうしともそ心　くにはかなふおかしきさいしやうの中将のはみつのいきをいゆたかにかきなしそゝけたるあしのおいさまなとなにはのうらにかよひてこなたかなたいきましりていたうすみたるところありまたいといかめしうひきかへてもしやういしなとのたゝすまひこのみかき給へるひらもあめりめもをよはすこれはいとまいりぬへきものかなとけうしめて給ふなにこともものこのみしえんかりおはするみこにていといみしうめてきこえ給けふはまたてのことゝもの給くらしさま　くのつきかみのほんともえりいてさせ給へるつゐてに御このしゝうして宮にさふらふほんともとりにつかはすさかの御かとの古万葉集をえらひかゝせ給へる四巻延喜のみかとの古今和歌集をからのあさはなたのかみをつきておなし色のこきもんのきのへうしおなしきたまのちくたむのからくみのひもなとなまめかしうて

まきことに御てのすちをかへつゝいみしうかきつくさせ給へるおほとなふらみしかくまいりて御らんするにつきせぬものかなこのころの人はたゝかたそはをけしきはむにこそありけれなとめてたまふやかてこれはとゝめたてまつり給ふ女こなとをもて侍らましにたにおさ　くみはやすましきにはつたふましきをましてくちぬへきをなときこえてたてまつれ給しゝうにからのほんなとのいとわさとかましきちんのはこにいれていみしきこまふえそへて奉れ給又この比はたゝかんなのさためをし給て世中にてかくとおほえたる上中下の人〻にもさるへきものともおほしはからひて尋つゝかゝせ給この御はこにはたちくたれるをはませ給はすわさと人のほとしなわかせ給つゝさうしまき物みなかゝせたてまつり給よろつにめつらかなる御たから物とも人のみかとまてありかたけなるなかにこのほんともなんゆかしと心うこき給わか人よにおほかりける御ゑともとゝのへさせ給なかにかのすまの日記はするにもつたへしらせむとおほせといますこし世をもおほししりなんにとおほしかへしてまたとりいて給はすうちのおとゝはこの御いそきを人のうへにてきゝ給ふもいみしう心もとなくさう　くしとおほすひめ君の御有様さかりにとゝのひてあたらしううつくしけなりつれ　くとうちしめり給へるほといみしき御なけきくさなるにかの人の御けしきはたおなしやうになたらかなれは心よはくすゝみよらむも人はらはれに人のねんころなりしきさみになひきなましかはなと人しれすおほしなけきてひとかたにつみをもおほせ給はすかくすこしたはみ給へる御気色を宰相の君はきゝ給へとしはしつらかりし御心をうしとおもへはつれなくもてなしゝつめてさすかにほかさまの心はつくへくもおほえす心つからたはふれにくきおりおほかれとあさみとりきこえこちし御めのとゝもに納言にのほりてみえんの御心ふかゝるへしおとゝはあやしううきたるさまかなとおほしなやみてかのわたりのことおもひたえにたらはみきのおとゝ中務の宮なとのけしきはみいはせ給めるをいつくもおもひさためられよとの給へとものもきこえ給はすかしこまりたる御さまにてさふらひ給ふかやうのことはかしこき御をしへにたにしたかふへくもおほえさりしかはことませまうけれといまおもひあはするにはかの御をしへこそなかきためしにはありけれつれ　くとものすれは思所あるにやと世人もおしはかるらんをすくせのひくかたにてなを　くしきことにあり　くてなひくいとしりひに人わろきことそやいみしうおもひのほれと心にしもかなはすかきりのある物からすき　くしき心つかはるないはけなくより宮のうちにおいいてゝ身を心にまかせす所せくいさゝかの事のあやまりもあらはかろ　くしきそしりをやおはむとつ

ゝみしたになをすき　くしきとかをおいてよにはしたなめられき位あさくなに
となきみのほとうちとけ心のまゝなるふるまひなと物せらるな心をのつからおこりぬれはおもひしつむへきくさはひなきとき女のことにてなむかしこき人むかしもみたるゝためしありけるさるましきことに心をつけて人のなをもたてみつからもうらみをおふなむつゐのほたしとなりけるとりあやまりつゝみん人のわか心にかなはすしのはむことかたきふしありともなをおもひかへさん心をならひてもしはおやの心にゆつりもしはおやなくて世中かたほにありとも人から心くるしうなとあらむひとをはそれをかたかとによせてもみ給へ我ため人のためついによかるへき心そふかうあるへきなとのとやかにつれ　くなるおりはかゝる御心つかひをのみをしへたまふかやうなる御いさめにつきてたはふれにてもほかさまの心をおもひかゝるはあはれに人やりならすおほえ給ふをんなもつねよりことにおとゝの思なけき給へる御けしきにはつかしううき身とおほししつめとうへはつれなくおほとかにてなかめすくし給御ふみはおもひあまり給折
　くあはれに心ふかきさまにきこえ給ふたかまことをかとおもひなからよなれたる人こそあなかちに人の心をもうたかふなれあはれとみたまふふしおほかりなかつかさの宮なんおほとのにも御けしき給りてさもやとおほしかはしたなると人の聞えけれはおとゝはひきかへし御むねふたかるへしゝのひてさることをこそきゝしかなさけなき人の御こゝろにもありけるかなおとゝのくちいれ給しにしふねかりきとてひきたかへ給ふなるへし心よはくなひきても人はらへならましことなとなみたをうけての給へはひめ君いとはつかしきにもそこはかとなくなみたのこほるれははしたなくてそむき給へるらうたけさかきりなしいかにせましなをやすゝみいてゝ気色をとらましなとおほしみたれてたち給ぬるなこりもやかてはしちかうなかめ給あやしく心をくれてもすゝみいてつるなみたかないかにおほしつらんなとよろつにおもひゐ給へるほとに御ふみありさすかにそみたまふこまやかにて
　つれなさはうき世のつねになりゆくをわすれぬ人や人にことなるとありけしきはかりもかすめぬつれなさよとおもひつつけ給はうけれと
　かきりとて忘かたきをわするゝもこや世になひく心なるらむとあるをあやしとうちをかれすかたふきつゝみゐたまへり